

和英辞典の収録語についての研究

田 嶋 明日香*

1. 研究目的

国語辞典は、各時代の語彙の指標として研究に使用されることがしばしばある。同じように、和英辞典も当時の言語状況の参考資料となると考えられ、国語辞典とは性格を異にするが故に、国語辞典を補う収録語を有していると推察できる。国語辞典との比較により、和英辞典の収録語の資料性について言及したい。

2. 研究材料

辞典の中でも、とくに小型辞典は現行の言葉を採用するという編集方針が強いため、小型和英辞典と小型国語辞典の比較を行う。

本稿では、小型辞典としては古い『小辞林』(1928年)および『袖珍コンサイス和英辞典』(1923年 以下『袖珍』と略す)に加えて、時代の変化を見るために、『小辞林』『袖珍』から約20年後に刊行された『明解国語辞典』(1943年 以下『明解』と略す)および『最新コンサイス和英辞典』(1940年 以下『最新』と略す)を材料とした。国語辞典同士、和英辞典同士において編集方針の違いが甚だしくないものを研究材料としている。¹

また、各語種の割合が平均的な、あ音とA音の収録語を具体例として抽出して分析する。なお、親見出しおよび親見出しの項目下に組み込まれた子見出しを「収録語」として調査した。

3. 分析結果概要

小型和英辞典と小型国語辞典では、和語の基本語を中心に、約40%の収録語が共通していた。1920年代と1940年代間に見られた、仏教語の減少と外来語の増加も和英・国語辞典両方に共通している変化である。

対して、小型和英辞典と小型国語辞典には以下のような差異が見られた。

- ①和英辞典は集約的編集法²により、複合語・派生語の収録が多い。
- ②国語辞典は漢字字典・古語辞典の性格も併せ持ち、一字漢字や古語の収録が多い。
- ③国語辞典は1940年代から口語形・表音が重視されるが、和英辞典は1920年代時点で文語形よりも口語形を採用、ローマ字による表音式表記を行う。

とくに大きな違いは、和英辞典における複合語の収録の多さである。派生語に関しては、見出し語になっていなくても、国語辞典では語釈後に補足として示している場合があるので、その補足まで含めれば派生語の収録度合いは和英辞典との大差はなくなる。

一方、複合語に関しては、和英辞典は外来語＋漢語(和語)の複合名詞や構成要素を別々に見れば全体の意味が把握できるような複合動詞といった、国語辞典には収録されにくい語を見ることができた。

*お茶の水女子大学大学院院生

複合語が多いことにより、国語辞典では確認できない、語の展開や使用の幅を和英辞典で確認することが可能であると判断できる。

4. 分析—和英辞典比較—

表1 『袖珍』『最新』のA音収録語数

	全体	差異	共通
『袖珍』	1985語	98語	1887語 (96%)
『最新』	2053語	166語	1887語 (92%)

表1からは、『袖珍』(1923年)と『最新』(1940年)は刊行までに17年の差があるものの、同じ編纂者の改訂ということもあり、9割の収録語が共通していたことが分かる。

共通の1887語を語種別に分けると、和語：52% 漢語：34% 外来語：3% 混種語：12%、という割合になる。混種語の割合が少なからずあるのは、英語を引く辞書であるということが大きい。「哀願する」「曖昧な」「亜細亜人」「愛蘭語」など、サ変動詞や各品詞形、基本語と併せて語形変化を学習する語を、和英辞典は網羅する必要があるからである。

続いて、表1において『袖珍』『最新』間で差異が出た語の語種割合を見ると、表2の通りになる。

表2 『袖珍』『最新』特有語の語種割合

	和語	漢語	外来語	混種語
『袖珍』	18%	74%	2%	6%
『最新』	15%	65%	15%	5%

『最新』には無く『袖珍』だけが有する外来語は2%と少ないが、混種語6%中に「アプト式」「東コート」「圧縮ポンプ」など外来語を含む語が約半分を占めていた。ただ、この点を考慮したとしても、『袖珍』から『最新』への改訂中に削除された外来語は少なく、増加した外来語および外来語を含む混種語は増加している。『最新』で増

えた外来語は以下のような語であり、日常用語が多いと言える。

アドレス アイスクリーム アクセント アマチュア (アマチャー) アンコール
アンパイヤ アンペヤ アパートメント
アルト アーチ アトリエ アウト

なお、『袖珍』のみが有していた外来語2%はすべて「阿羅漢」「阿修羅」などの梵語つまり仏教用語であり、『袖珍』から『最新』において、仏教用語が減少していることも差異のひとつとして挙げられる。

5. 分析—国語辞典比較—

表3 『小辞林』『明解』あ音収録語数

	全体	差異	共通
『小辞林』	1829語	487語	1342語 (73%)
『明解』	2142語	800語	1342語 (63%)

表4 『小辞林』『明解』特有語の語種割合

	和語	漢語	外来語	混種語
『小辞林』	72%	22%	3%	4%
『明解』	60%	12%	25%	3%

表3において差異が出た語を語種別に分けると表4の通りになり、『小辞林』『明解』では漢語の増減が少ないことが分かる。加えて、一字漢字の収録も多く、国語辞典の「字引き」という性格を窺える点である。

また、表4の割合からは『小辞林』と『明解』間で増減している語種は和語が多いことが見て取れる。これは、『小辞林』が文語形、『明解』が口語形を重要視しているためである。『明解』において文語形見出しを大幅に削除しているため、『小辞林』『明解』間で和語の増減が甚だしいという結果になった。

さらに表4からは、『明解』では外来語が増加していることも分かる。殊に『明解』の外来語は、専門用語から日常的な言葉まで、多岐に亘るカテゴリーの語を収録しているという特徴がある。『明解』のみが有する外来語をカテゴリー別にとすると、以下のような類の言葉が上位にあがった。

化学：アクチニューム アルデヒド
 食：アップルパイ アラカルト
 服飾：アストラカン アンダアシャツ
 スポーツ：アウトドロップ アスレックス
 音楽：アコオル アレグロ
 動植物：アネモネ アマリリス
 状態・状況：アクチヴ アンニュイ

『明解』発行当時の1943年は戦時中であり、英語は敵性語とされてはいたものの、日本語の中にとくに英語が入り込んでいたことが『明解』の外来語の多さから窺える。³

なお、『小辞林』のみが有する外来語は、同年代の和英辞典『袖珍』と同じく、梵語（仏教語）が多い。

6. 分析—和英・国語辞典比較—

表5 『袖珍』A音・『小辞林』あ音の収録語数

	全体	差異	共通
『袖珍』 (和英1923年)	1985語	1169語	816語 (41%)
『小辞林』 (国語1928年)	1829語	1013語	816語 (45%)

表6 『最新』A音・『明解』あ音の収録語数

	全体	差異	共通
『最新』 (和英1940年)	2053語	1196語	857語 (42%)
『明解』 (国語1943年)	2142語	1285語	857語 (40%)

表1および表2で示した通り、和英辞典同士（『袖珍』『最新』）で共通する収録語は9割以上、

国語辞典同士（『小辞林』『明解』）での共通語は6～7割となっていた。しかし、表5および表6から、同年代であっても和英辞典と国語辞典とでは共通する語は4割に留まることが判明した。基本語となる和語が主に共通しており、他の語種や派生語・複合語での差異が目立つ。

差異が大きく現れた部分としては、まず国語辞典（『小辞林』『明解』）には一字漢字・古語が多いことが挙げられる。国語辞典はある程度、漢字字典・古語辞典的性格をも兼ねているため、この点で和英辞典との差異が出るのは推察しやすい。むしろ、国語辞典と和英辞典との比較で新たに認められたのは、和英辞典に複合語が多いことである。

7. 和英辞典の複合動詞

具体的に、和英辞典が国語辞典よりも多く収録している複合語として、まず複合動詞がある。例えば、「有り触れる」のように前項要素「有る」と後項要素「触れる」とに分解してしまうと全体の意味が分かりづらい複合動詞は、国語辞典にも和英辞典にも収録されている。また、石井（2005, 2007）が国語辞典には「前項が語彙的な接頭辞で、前項が実質的意味を持つ」複合動詞が載りやすいと述べているように、『小辞林』『明解』にも「明け渡る」など後項が語彙的意味を持つ複合動詞が見られる。

ところが、和英辞典『袖珍』『最新』には「遊び戯れる」のように構成要素から複合動詞全体の意味を導き出せる語も収録されている。『袖珍』『最新』は親見出し下に子見出しを列挙していく集約的編集法を採っているため、基本動詞の下に複合動詞を挙げていきやすい。もちろん、英語という対照言語があるために、国語辞典よりも多くの語形を収録する必要があるため、複合動詞の採用が適っているとも言える。

8. 和英辞典の外来語

和英辞典と国語辞典とを比べると、外来語自体は国語辞典のほうが、多種のカテゴリーのより多くの外来語が収録されている。けれども、外来語＋和語（漢語）の語は国語辞典には少なく、和英辞典のほうに多く収録されていた。

例えば、外来語が増えている1940年代の『最新』と『明解』では、和英辞典『最新』のほうにのみ以下のような語が見られた。

アイスクリーム製造機 赤靴用クリーム
悪性インフレ アンペヤ時 暗室ランプ
アンテナ回路 アラビア夜話
アルコール飲料 アルト歌手

『明解』には「アイスクリーム」「アルト」などの外来語自体は収録されているが、「アイスクリーム製造機」「アルト歌手」という語は無い。

上記のように外来語が単独ではなく、漢語や和語と併せた語として使用されているということは、その外来語の日本語としての定着性を窺わせる。和英辞典『袖珍』『最新』を見ることで、当時の言語状況において普及度の高い外来語を確認できるのではないだろうか。

さらに、『最新』は「アンコールを浴びせる」「アスファルトを敷く」など、外来語の用例文もある。和英辞典は句や文を多く記述しているため、語自体だけでなく、語の使い方が確認できると言えよう。

9. 総括

刊行に約20年の間がある和英辞典同士および国語辞典同士の差異よりも、同年代の和英辞典と国語辞典を比較した時の差異のほうが大きい。それは、国語辞典が「漢字字典」「古語辞典」の性格を有している辞書であるのに対し、和英辞典が

他言語を学ぶという全く別のコンセプトを持っているために生じる差異である。

差異の中で、和英辞典における複合語の収録度の高さは、国語辞典が収めきれなかった当時の言語状況の一端を示すものだと考えられる。とりわけ和英辞典の外来語を含む複合語に関しては、該語の普及度を考える材料になるとと思われる。当時の雑誌・新聞記事との比較調査も整理し、和英辞典における資料性の傍証を固めていきたい。

注

- 『明解国語辞典』は『小辞林』を改訂することから編纂が始まった国語辞典であり、『最新コンサイス辞典』は『袖珍コンサイス辞典』の2回目の改訂にあたる和英辞典である。
- 集約的編集法とは、基本語の項目下に、該語を根幹とする複合語や派生語を記載していく方法である。例えば、「赤一」を親見出しとし、その項目下に「赤帽」「赤茶色」「赤調色」などの子見出しを記載していく。
- 『明解国語辞典』の外来語については、松本直枝「第二次世界大戦中のカタカナ語－『明解国語辞典』を基に－」(OLVA NO.7 2000)、田嶋明日香「『明解国語辞典』旧版と新版の研究－小型国語辞典の改訂について－」(お茶大文111号2009.07)に指摘がある。

参考辞書・文献

- 『袖珍コンサイス辞典』1923年（大正12年）石川林四郎編 三省堂刊
- 『最新コンサイス辞典』1940年（昭和15年）石川林四郎編 三省堂刊
- 『小辞林』1928年（昭和3年）金澤庄三郎編 三省堂刊
- 『明解国語辞典』1943年（昭和18年）見坊豪紀編 三省堂刊
- ・石井正彦『現代日本語の複合語形成論』（ひつじ書房 2007）
- ・石井正彦「辞書に載る複合動詞・載らない複合動詞」（『日本語学』テーマ別ファイル(3)語彙Ⅰ 2005）
- ・松本直枝「第二次世界大戦中のカタカナ語－『明解国語辞典』を基に－」(OLVA NO.7 2000)